

の時代のは、国際価格の乱高下を狙った投機筋の動き、それに振り回される生産地、などのように、関係がよりグローバルで、極端で、でもその因果が見えにくくなっていると感じます。問題は複雑、でも解決策は以外に単純かとも思います。能登の米や魚を食べ、地元の野菜を食べ、フェアトレー

ドの服を着ます。それだけでいくつもの繋がりが保たれて、子どもたちも健康。いいことばかりです。

同じ考えの人たちと知恵を合わせ、この動きを加速していきたいと思っています。



フェアトレードくらぶ 代表
ほしの あき

沖縄の海が教えてくれたこと

沖縄・辺野古（へのこ）へ

沖縄本島中北部の小さな漁村である辺野古を私が訪れたのは、2004年の秋のことでした。

「ホテル・ハイビスカス」という映画の舞台になったこの場所には、さとうきび畑と低い屋根が続く沖縄らしい風景が今もそのまま残っています。

辺野古へ行くきっかけとなったのは、2004年4月19日に沖縄の友人から届いたこんなメールの一言でした。

「絶対に基地を作らせない。海は沖縄の命」

ちゅ 美ら海を守りたい

辺野古の海はとても美しく、たくさんの生き物が棲んでいます。海底に広がるサンゴ礁は天然の防波堤の役割を果たし、そのサンゴのじゅうたんには海草が繁っています。人魚姫のモデルになったといわれている天然記念物ジュゴン、その海草を食べにこの海へやってきます。その個体数は2桁程度で、成熟雌は1桁とも言われています。ジュゴンだけでなくウミガメやクマノミなどたくさんの生き物がこの海で暮らしています。まさに



ジュゴンが見える丘

無数の命が宿る宝の海なのです。

でも、今この海を埋め立てて新しい米軍基地がつくられようとしています。それに反対して海を守ろうとする人達が立ちあがりました！彼らは辺野古のおじい・おばあを中心にみんなで座り込みをしながら基地建設をやめてほしい、と訴えています。



座り込みテント

海は私たちの命

防衛庁の出先機関である防衛施設局が、辺野古の海に基地をつくるため、サンゴのじゅうたんに穴を開けて地質を調べる「ボーリング調査」をやるようとしています。

座り込みをしている人達はなんとかその調査をやめてほしくて、毎日船やカヌーで海に出かけて調査をしようとする作業船から海を守っています。サンゴや海草が穴だらけになって死んでしまうと、そこにやってくるジュゴンなどたくさんの生き物が行く場所を失ってしまうからです。そして同時にそれは辺野古の人々から海を奪ってしまうことにもなるのです。海のそばで暮らす人々にとってこの海は「命の海」そのものなのです。

沖縄からイラクへ

辺野古漁港のすぐ隣にはアメリカ海兵隊のキャンプ・シュワブという基地があります。基地の中では米兵達が毎日戦車に乗ったり、実弾の射撃訓練をしながら戦争へ行くための準備をしています。

辺野古の浜とキャンプ・シュワブの境には有刺鉄線が引かれ、浜辺を歩いていると時々米兵の若い男子を有刺鉄線越しに見かけることがあります。

ある日見かけた米兵の男子に「なんで軍隊に入ったの？」と聞いてみました。

すると彼は「大学に行きたかったから」と答え

たのです。

アメリカでは軍隊に入るといろいろな面で優遇されるから「大学に行くための奨学金がほしくて」とか「家族を助けたくて」という理由で軍隊に入る人がほとんどのようです。その貧しさの実態は、私達日本人には想像もつかないほどだと聞いたことがあります。

現在沖縄にいる約25,000人の米兵のうち約5,000人がイラクへ行っています。

私が言葉を交わした男子もいつかイラクに行くのでしょうか。「もしイラクに行っても、死なないでね」と私が言うと、彼は「当然だろ」というような表情をしていました。

私には他に言葉が見つかりませんでした。有刺鉄線越しに、もう二度と会うことがないかもしれない、戦場に行ってしまうかもしれない彼に、どんな言葉をかければいいのかわからなかったのです。

戦争の加害者になってはいけない

沖縄の基地で行われているのは、まさに「人殺しの訓練」でした。辺野古で海を守る人達は「そんな人殺しの基地はもういらぬ」と言っています。

「基地ができることを容認することは、戦争に加担するのと同じこと。私達はこれ以上戦争の加害者になってはいけないのです」

私は辺野古に来て初めて、自分が知らないうちに戦争の加害者になっていることを実感したのです。「戦争は嫌だ」と思いながら、沖縄の基地問題を今まで真剣に考えたことがなかった。辺野古に行くまで、辺野古の問題は辺野古だけの問題で、自分は部外者だ、と心のどこかで思っていました。でも、海を守る人達に出会い、そうではないことが本当によくわかったのです。

海はつながっています。辺野古の人々も石川に



フェンスにて

住む私も同じひとつの海を共有しています。辺野古の海にいらない基地は他のどこにも必要ではないのです。

沖縄の基地で戦争の訓練をした兵士達は、今もどこかで誰かを殺しているかもしれません。これ以上命を奪う基地を作らせないために、私達自身が声を上げる時が来ているのだと思うのです。

声を上げる、ということ

「戦争は嫌だ」と思っている、それを声に出さないと自動的に「戦争は嫌じゃない」側の人達の仲間になってしまう時があります。「投票」というちゃんと声を出す権利があるのに、それを放

棄してしまう人もいます。

でも、新しい基地を作るために使われるお金は私達の税金です。税金を支払っている限り私達は基地とは無関係ではないし、戦争にも加担しているのです。

私は声を上げて「私の税金をそんなことに使うな～～！」と言いたい！そんなことのために私は納税しているのではないのです。そして「戦争は嫌だよ」と大きく声を上げたい！私達はまだものが言えるチャンスをたくさん持っているのです。私達が声を出さなくなり、本当に「ものが言えなくなる時代」こそが戦争をつくるのです。だから、「戦争には行くな、選挙に行こう！」



無添加漬物 風来 店主
西田 栄喜

価値観を変える農

サービス業、ホテルの支配人業をやってきた私が「農」を選んだ最終的な理由は漠然とした不安である。豊かで物は溢れているけど何となく不安。そんな人が今の日本では多いのではないだろうか。

私は現在、石川県能美市で日本一小さい農業を経営、実践している。

正直、若い頃は農業にうらびれたイメージしかなかった。25歳の頃、一年間オーストラリアに遊学した。その時に出会った農家達は皆、自信に溢れていた。「私達がいなければこの国は餓える」のだと。そして農家に限らずあちらでお父さんといえば、庭の手入れをし、車を修理し、家を直せる、また家を建ててしまう人も結構いた。それに比べると今の日本人はなんと脆弱なのだろうか

思ってしまった。

生活力という日本では経済的に豊かであることである。しかし本来の生活力とは衣食住を賄えるということではないだろうか。あくまでその代替手段がお金なのである。衣食住のほとんどを輸入に頼る日本。そこに漠然とした不安を感じる人が多いのではないだろうか。その不安からイザという時、老後のためと貯蓄をしているのではないだろうか。だがそれでは根本的な解決にはならないのでいつまでも不安がぬぐえないのである。

そこで文字通り地に足がついた職業ということで農家、農的暮らしをしたいということで新規就農や定年帰農も一時期ブームのようになった。しかし行政は相変わらず「拡大再生産」の方向しか示さず農的暮らしをしたい人とのギャップが大きくある。そして就農しても途中で挫折する人も後を絶たない。

なぜそのようなことになるかということ、やはりこの経済至上主義の流れにいつのまにか流されてしまうからである。農的暮らしを望んだのにいつ